

## 2020年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	<b>乳幼児のコンピテンシーにおける順序性の検討 －保育評価ツールとしての活用を目指して－</b>
キーワード	①乳幼児のコンピテンシー、②保育の質、③ポーランドの幼児教育

### 研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	マツシタ アスカ 松下 明日香
配付時の所属先・職位等 (令和2年4月1日現在)	金沢学院大学 文学部 教育学科 助教
現在の所属先・職位等 (令和4年7月1日現在)	金沢学院大学 教育学部 教育学科 助教
プロフィール	大学院時代に教員免許と保育士資格を取得し、修了後は大阪府の公立保育園に勤務する。現勤務校での教育学科立ち上げをきっかけに、保育者養成に携わるようになる。現在、保育を担う人材育成のため、遊びなどの実体験を大切に、学生が身体と心で保育を理解し、実践できるようになるプログラムの開発に取り組んでいる。

### 1. 研究の概要

#### (1) コンピテンシーのレベル付け

3歳未満児が発揮するコンピテンシーは何かを明らかにし、筆者が作成した幼児のコンピテンシーリストに順序をつけることを目指す。

本研究で用いる幼児のコンピテンシーリストは、OECDのDeSeCoプロジェクトが作成したキー・コンピテンシーをもとに導き出したものである。DeSeCoのキー・コンピテンシーは、全ての人にとって重要で、個人の幸せや成功のみならず、社会が正常に機能するために身につけ、発揮される能力という考えに立って選択されたもので、低いレベルから次第に高いレベルに向かうという特徴がある。

乳児期にはどのようなコンピテンシーを引き出そうとしているのかを分析する。現行の保育所保育指針のねらいと内容の記述からコンピテンシーに関わる記述を抽出、分類し、基礎的なコンピテンシーに位置づける。

当初の計画では、保育園で0歳児から5歳児を対象に保育観察を実施し、年齢別にコンピテンシーの発揮傾向を分析する予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大のため保育観察が実施できず、保育所保育指針にみる基礎的なコンピテンシーの選出に留まった。

#### (2) 諸外国での応用に向けた基礎調査

幼児のコンピテンシーリストを、国を超えて活用できる保育の質の評価ツールとするにあたり、国外でもコンピテンシーリストを用いて子どもの育ちをみとることができるかを検討する必要がある。

調査の目的は、評価ツールの有用性を確認するための、研究協力園および研究協力者を得ることである。コロナ禍のため渡航ができず、対象国をシンガポールからポーランドに変更した。ポーランドを選定した理由は、コンピテンシーベースの幼児教育を導入していることと、オンライン上で研究協力者を得ることができたことである。

日本ではポーランドの幼児教育分野の研究はほとんどなされていない。文献調査および幼稚園教諭へのインタビューを通じて、幼児教育の概要をコンピテンシーの観点から探る。

## 2. 研究の動機、目的

子どもにとってよりよい保育をどの園でも実現したい、遊びから育まれる力の重要性を広く一般に証明したいという思いが研究の原点である。

SDGs(持続可能な開発目標)のゴール4ターゲット2では、保育のアクセスのみならず、高い質の保育の提供が世界共通の課題であることが示された。諸外国にもれず、日本においても保育の質向上が求められており、何らかの対策を講じる必要がある。保育の質を高めるためには、保育の評価が欠かせない。そこで、保育において子どもにどんな力が育っているかを可視化し評価する、共通の枠組みの構築が必要であるというのが、本研究の動機である。

保育の質を評価する上では、乳幼児にどのような力を育てるのかを定義する必要がある。保育所保育指針や幼稚園教育要領において、乳幼児期に育てる心情・意欲・態度は、成人以降を見通した時に、具体的にどのような力と結びつくのかまでは示されていない。そのため本研究では、DeSeCoプロジェクトが定義したキー・コンピテンシーに紐づく幼児のコンピテンシーリストを、育てたい子どもの資質能力として用いることとする。

子どもが今どのようなコンピテンシーを発揮したかをみると、保育評価ツールの開発を上位目標とし、本研究では評価ツールのもととなる、幼児のコンピテンシーリストをコンピテンシーの順序性の観点から整理し、リストの精度を高めることを目的とする。

## 3. 研究の結果

### (1) コンピテンシーのレベル付け

乳児期において育てようとしているものをコンピテンシーの枠組みと比較した際に、身体的発達に関する視点は、コンピテンシーのカテゴリー3「自律的に活動する」、社会的発達に関する視点と精神的発達に関する視点は、カテゴリー1「相互作用的に道具を用いる」、カテゴリー2「異質な集団で交流する」の前段階となる内容が見られた。具体的にはカテゴリー1の「体験したことを言語化する」「素直な気持ちを伝える」「考えを言葉で説明する」「自分の思いを主張する」「要求を伝える」「言葉に感情を込める」である。カテゴリー2では「他者との繋がりを感じる」「他者の気持ちを想像する」「他者に配慮する」等である。カテゴリー3では特に「生活の流れの見通しをもつ」との繋がりが深い。これらは、コンピテンシーの基礎的なレベルに位置づくと考えられる。

一方で幼児版コンピテンシーでは扱っていない内容が見られた。例えば、乳児期は言語発達が未熟であることから、言葉による伝え合いよりも身体表現に関する記述量が多くなっている。乳児期ならではの内容をコンピテンシーリストに組み込むかどうか検討の余地がある。

今後は感染症収束の折を見て、当初の計画通りの調査を実施したい。

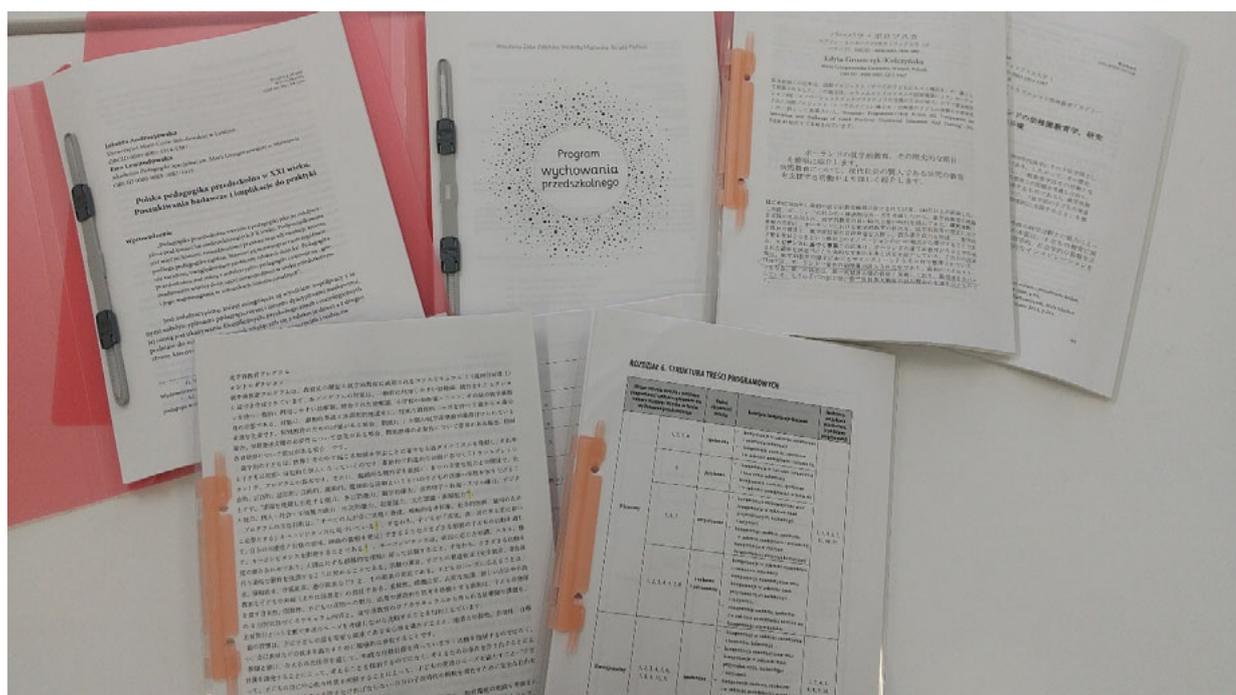
### (2) 諸外国での応用に向けた基礎調査

ポーランド国立幼稚園(Przedszkole nr 308 “Krasnala Hałabały”)と、現地幼稚園教諭2名、通訳者より研究協力を得た。文献資料としては主にポーランドの就学前教育コア・カリキュラムと、国立幼稚園の教育課程(エドカティア出版)を入手した。

就学前のコア・カリキュラムには、育てたいコンピテンシーとして4つの領域が定められている。①子どもの発達の物理的領域では、基本的な生活の自立、全身運動、手指の操作などに関して、卒園児に望ましい子どもの姿が9項目記述されている。②子どもの発達の感情の領域では、感情を認識し表現すること、感情をコントロールすること、他者への共感や尊重などについて11項目が記載されている。③子どもの発達の社会的領域では、他者との関係を築くこと、自身と他者の権利と責任の尊重、挨拶など社会的に望ましい言動が示されている。④子どもの発達の認知的領域は内容が最も多く、読み書きを含む言語から、音楽表現、シンボル・色・時系列・金銭・数・図形・長さなどの概念まで多岐にわたる。特に音楽表現の記述は厚く、音楽がポーランド文化や生活に根付いており教育として重視していることが分かるものであった。

今後は、ポーランドの幼児教育について海外の先行研究を整理し、コア・カリキュラムの根底にある教育観を明らかにしたい。またコア・カリキュラムはあくまで指針であり、具体的

な保育実践については、出版社等が発行したカリキュラムに基づき行われている。そのため、カリキュラムと保育実践の両面から幼児教育の実態を探っていききたい。



#### 4. 研究者としてのこれからの展望

私は保育現場の実際が分かり、かつ十分な研究推進力を有する保育・幼児教育分野の研究者を目指しています。女性研究者奨励金に採択されたのは、保育者から研究者へと転身して間もなく、具体的に何を自身の専門とするかを模索していた時期でした。ご支援いただいた本研究を基盤として、研究者の軸となる研究を固め発展させたいです。具体的には乳幼児期のコンピテンシーから保育の評価ツールを完成させ、保育現場で活用することと、ポーランドにおけるコンピテンシーベースの保育の実態を解明することです。そしてこれらの知見を、保育者養成や研修を通じて、保育現場へ還元することが私の役割であると考えています。

#### 5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

この度はご支援をいただき誠にありがとうございました。女性研究者奨励金のおかげで、コロナ禍でも研究を進めることができました。

特に、日本では幼児教育分野での研究がほとんどされてこなかったポーランドで研究協力者を得て、研究フィールドを開拓できたことは大きな成果です。ポーランドはコンピテンシーベースの幼児教育を導入しており、かつ保育者には修士号の取得が義務付けられています。ポーランドの教育を乳幼児のコンピテンシーの視点から分析することで、日本の保育の質向上に向けて何らかの知見が得られるのではないかと考えます。

また、ご支援いただいているという有難さも研究を進める原動力となっていました。今後も地道に研究を続け、微力ながら幼児教育の分野および日本の社会へ貢献したく存じます。